

キューガーデンキューパゴダ

～文化財保全・修復～

報告者:岸本 裕一

1. 概要

- キューガーデンとは、ロンドンの西の郊外、市の中心部から自動車で1時間以内の場所にある、世界遺産認定の王立植物園のことである。約120ヘクタールもあるこの植物園には、250年に及ぶ歴史があり、3万種類以上もの植物が収集されている。1859年に刊行された、進化論の原点であるチャールズ・ダーウィンの歴史的名著『種の起源』は、この植物園が存在したことにもよるところが大きいとされている。
- キューパゴダとは、この植物園内の東洋関連植物やモニュメントを集積させてあるオリエントエリアの中にあり、中国のパゴダ(仏塔)を模して、William Chambers 卿によってデザインされ、Princess Augustaへ献上されたというもので、西洋と東洋との融合となるデザインであり、創建当初より、名所となってきたものである。
- 歴史的建造物、保存・修復の権威、Dr. Lee Prosser 教授から、現在、保全・修復工事を行っている Kew Gardens の Kew Pagoda(オリジナルは1762年建設、)をめぐる文化財保全・修復の現状と方向性について調査を行なった。実際に修復現場の足場に上り、保全・修復の状況を視察したものである。

2. 説明者

リー プロッサー教授



Dr Lee Proseer

1988年にウェールズ大学を卒業したプロッサー教授は、ブリストルで博士研究を続ける前に、考古学とビクトリア朝の研究を行った。大学を卒業後、英国東部の歴史的建造物を記録したチームを率いて、2003年に歴史王立宮殿で歴史的建造物のキュレーターとしての役割を果たす。プロッサー教授は歴史的な宮殿のいくつかの主要プロジェクトを主宰して、Kew Palace、Kensington Palace、Great Pagoda (Kew Palace 近郊)の修復を行っている。さらには、日本にも再三訪れて、仕事をしてきており、高知県では2年間滞在して、文化財の修復の仕事に従事したということである。



昔のキューパゴダの絵

著書も多数あり、その中の1冊には、*Kew Palace: The official illustrated history (2006)*があり、キューガーデン内にある宮殿の詳細な調査結果を公表している。

3. 主な説明内容

キューガーデンキューパゴダは、年に王宮宮殿に附属する植物園として開園したキューガーデンの中に、1762年に建てられた中国の仏塔である。八角形の塔で、10層構造であり、高さ約50m、内部には、253段の階段が設置されている。

調査時点では、塔全体に、足場が組み立てられ、さらに、テントでの覆いが被せられていた。さらに、工事用のエレベーターも設置されており、最上階までは、そのエレベーターで移動した。ヘルメットを着用して、足元の安全にも留意しつつ、調査を進めた。

約50mの10層の八角の塔は、一層ごとに直径が30cmずつ小さくなる構造になっている。また、各層には各角に龍が1つで、合計80の龍が作りつけられていた。それらは、木製だが、純金でメッキされていた。これらの龍は、1784年にジョージ4世が借財のかたに売ってしまったものであるが、今回の事業では、これらも復元される予定である。

創建者は、中国の工芸について研究はある程度行ったものの、時には、基本を度外視している。例えば、仏塔は中国では、通常、7層（日本においては3層や5層も存在する。）であ



修復中のキューパゴダ

るが、10層としている点などがある。

4. 主な質疑

○ 耐震対策の必要ないことはわかるが、落雷対策は？

→ 避雷針を早期から設置しており、それにより落雷による被災が回避された。

○ 文化財保全・修復工事の基本は、創建当時のありようにできるだけ近づけることと思うが、どのような工夫をしているか？

→ 素材の化学分析などを通じて、創建当時の状況を模索している。それには、博士の日本滞在経験も生かされている。

○ 工期は？

→ 来年の2018年までである。



レンガの黒い染みは19世紀の大気汚染が原因とのこと

5. 所感

文化財保全・修復の観点から、今回キューガーデンパゴダの状況を視察したわけであるが、これまで、文化・教育常任委員会の管内調査の一環として、仁和寺、大徳寺塔頭などの文化財保全・修復工事の現場を視察して、その精緻な取り組みに接しており、それらとの比較をしまい、保全・修復に要する資材などへの配慮の程度に、やや疑問に思われる点も散見された。すなわち、日本の文化財修復・保全に当たっては、創建当時の資材を可能な限り、使用するのが原則になっており、それが現在においては、一般に存在しないような場合においても、古文書などにより、できうる限り、創建当時の資材を、調製して再現するような対応をしている。今回の調査において、この資材調達精巧さについて、若干不安をぬぐい切れないものがあつたことを報告しておきたい。

しかしながら、それを置いても、文化財保全・修復についての意気込み・情熱は尊敬すべき点が多かった。また、地震の稀有な地方であることが、いかに有難いことか痛感させられ

たものもある。さらには、高度のある建物であるにも拘わらず、避雷針が当初より設置されていたこともあり、落雷による被害がなかったことは、一驚に値する。日本に存在した仏塔の多くが落雷により焼失してきたことを想起するとき、これは大変な優位性に思われた。さらに、台風などによる暴風もまれであることから、暴風による倒壊もなかったことも僥倖であると思われた。日本に存在した仏塔の多くが暴風により倒壊してきたことを想起するとき、これも大変な優位性に思われた。

最後に、視野をキュー王立植物園キューガーデン全般に広げてみたい。京都府も、京都府立植物園を持っている。この2園を比較して、今後の、府立植物園の在り方を探ってみたい。

前にも触れたが、キューガーデンは世界遺産にも登録され、また、ロンドン観光の5指にも入る観光スポットである。歴史的建造物も多いロンドンにあっても、観光スポットとしての魅力が際立つ。

象徴的な施設として、パームハウスがある。キューガーデンの代表的な温室である。名前のおり南国のヤシ類、パームを展示する温室で、ビクトリア時代のガラス建築としても貴重な建物である。

また、日本人にとっては、ジャパニーズ・ゲートウェイも印象的である。桃山時代の京都西本願寺勅使門の複製を配した、日本庭園も見ものである。1910年にロンドンで開催された日英展示会のために作られたもので、日英同盟が最も緊密であった時代のものとして、現存している。

これらを引き合いに出すまでもなく、観光スポットとしての露出には、このキューガーデンは特出している。本府の府立植物園もこのような観光名所としての取り組みにおいても、様々な工夫のなされているところであるが、キューガーデンの取り組みから学ぶところも大きいと思われる。分けても、入園料の差の大なることも記しておきたい。キューガーデンの入園料は、16ポンドであり、1ポンドを150円とすれば、2,400円となる。府立植物園の入園料が200円であるのとは対照的である。安いことを売りにする運営方針を改め、応分の入園料を入園者に求めて、そのいただいた資金で、より一層の内容充実を図る戦略に、本府も転換すべき時代になっているとも思われる次第である。

